

特集：日本人の結婚と出産 その3

だれが「両立」を断念しているのか
未婚女性によるライフコース予測の分析

岩 澤 美 帆

6歳未満の子を持つ女性の7割が家事専業という日本の女性のライフコースは、当事者にとってどの程度満足な結果なのであろうか。本論文では、未婚女性が「理想」とするライフコースと、自分の将来として「予想」するライフコースの不一致に着目し、今日の女性のライフコース選択の実情を明らかにする。

出生動向基本調査によれば、理想のライフコースの実現可能性（理想と予想が一致している割合）は、この10年間徐々に高まりつつある。しかし1997年時点においてもなお3分の2の女性が理想とは異なる将来像を描いていることは看過できない。就業と子育ての両立を理想とする女性の7割以上が両立を実現できないだろうと予想しているのみならず、専業主婦を理想とする場合も8割以上が専業主婦にはなれない、と考えていることがわかった。さらに見方を変えると専業主婦になると予想していても4分の3の女性にとってはそれが必ずしも本意な結果ではないことが明らかになった。

多くの女性がライフコースの理想と予想にギャップを抱えている背景をさぐるため、とくに両立を理想とする女性に着目し、当事者が予想する3つの結果（両立の実現、子を持たず就業のみ、育児専業）を規定する諸要因を多項ロジスティック分析によって明らかにした。両立実現に向かわせる要因としては、「官公庁勤務」「昇進の見込みがある」「母親が両立を経験」などが有意差を示した。一方、「母親が育児専業であった」「大企業勤務である」などの場合には両立を断念して育児専業を予想し、さらに「年齢が高い」「仕事と私生活のバランスがうまくいっていない」といった場合には子どもを持たないという見通しを持つ傾向が明らかになった。

．はじめに

日本の女性は結婚・出産・就業に関して今後どのようなライフコース¹⁾をたどるのか。この問いに対する答えは21世紀の日本社会の見通しを大きく左右する。急激な高齢化と労働力不足を回避するひとつのシナリオとして、子どもを持ちつつ就業する女性の増加が期待されているからである。ところが、現在のところ出産後も就業を継続し、育児と就業を両立する女性が大量出現するような兆しはみられない。いまだ小さな子どもを持つ多くの女性が就業せず育児に専念する状況が続いている。さらにそれを上回る勢いで、子どもを持たずに就業する女性が増加の一途をたどっている。このような若年女性の就業状況の二

1) ライフコースといった場合、様々な捉え方が可能であるが、本稿では主に結婚・出産を中心的なイベントとみなし、それに伴う就業状況の変化に基づいてライフコースを類型化する。

極化について、日本における両立支援策の遅れとみる声がある一方で（大沢 1999）、根本には若年女性における強固な専業主婦志向があるとの指摘もある（小倉 1998；山田 1999）。このような議論をみると、日本の女性がなぜ育児専業か子どもを持たない就業かの二者択一に向かうのかを理解するためには、女性自身がどのようなライフコースを望んでいるのかを明らかにすることが重要な鍵となっていることがわかる。

これまで「女性が就業と子育ての両立をしていない」ということは、女性の生き方に関する選択肢の少なさや社会からの押しつけの結果であるという前提で論じられることが多かった。確かに女性が結婚や出産を機に退職することを当然視する企業は少なくない。両立する女性が少ないことが、差別という観点から多くを説明できるのは事実である。しかし一方で、男女を問わず、個人の事情に柔軟に対応する複線的なライフコースが、積極的な意義を持つものとして見直されてきているという背景も無視できない（今田 1989）。そもそも女性の生き方におけるライフコースという視点は、家族や個人の画一的発達段階を前提とした「ライフサイクル」の枠組みではとらえきれない、女性個人の多様性を抽出する必要性から注目されてきた概念である（Aldous 1990；大久保 1990；今田、平田 1992）。多様なライフコースに積極的な意味を持たせるとすれば、両立している女性や、育児に専念する女性の多寡それ自体は問題ではないことになる。しかしライフコースというアプローチは、多様なライフコースがしばしば待遇の不平等を伴っており、当事者が常に納得しているわけではないことも明らかにしてきた。我々はライフコースの多様化という現象を、一貫したキャリア形成以外の生き方 - 中途採用、社会人教育、ボランティア・NPO 活動など - に関する基盤整備の進展として積極的に評価すると同時に、個人の生き方が社会制度や時代に規定され、必ずしも満足な結果として認識されていないという側面にも留意して議論しなければならない。

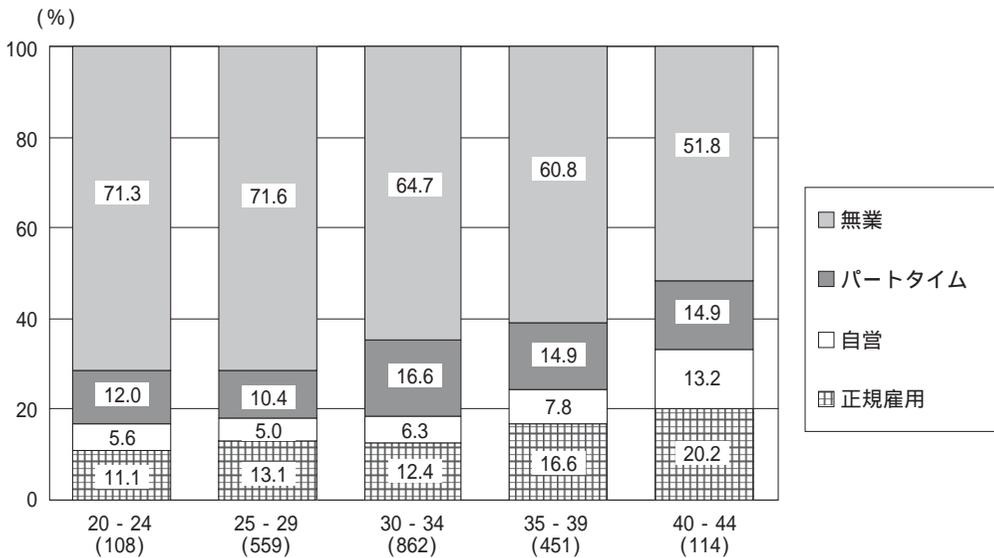
このような時代に、ライフコース選択の問題として問うべきことがあるとすれば、「現実のライフコースはどの程度当事者の思い通りの結果なのか」、別の見方をすれば、「思い通りのライフコースを選択することは、どの程度可能なのか」、といったことではないだろうか。もし、思い通りのライフコース選択が難しいとすれば、それこそが現在20代、30代で結婚や出産を望みつつもそれを先延ばしにしている人が大量に存在している事実に対して、何らかの説明を与えることになると考えられる。そこで本論文では(1)「当事者が望むライフコースの実現」といった観点から、今日の女性のライフコース選択の実態を示し、とくに(2)就業と育児の両立を望みながら、それを断念している女性の事情を明らかにすることによって、効果的な両立支援政策の可能性について論じたい。

・ ライフコースの現状

戦後の日本は女性の雇用労働者化をすすめてきた。しかしその内実は、未婚で就業する女性の増加と、子育て後に家計補助的な就業を再開する女性の増加を反映したものであり、小さい子どもをもつ女性の多くは、現在でも就業していない。例えば、近年の労働力調査

特別調査報告（総務庁統計局 1997）によれば、6歳以下の子どもがいる世帯で妻が就業しているのは36%であり、さらに週35時間以上働いている雇用者に限定すれば13%にとどまっている。1997年におこなわれた第11回出生動向基本調査でも、6歳未満の子どもをもつ女性の年齢階層別就業状況は図1のようになっており、ほぼ同じような結果を示している。これは他の先進諸国と比較しても低い値である²⁾。他にも、近年結婚退職は減少する傾向にあるが、一方で出産退職は増えているという結果が報告されている（今田 1996；真鍋 1998；新谷 1998；永瀬 1999）。たとえ未婚時に就業していても、結婚・出産を通じて就業を継続する女性はその2割に満たない（岩澤 1999）。現在の日本においては、就業と育児の両立は女性にとって一般的なライフコースではないのである。しかしここで注意しなければならないのは、現在のように晩婚化が進んでいるなかでは、20代、30代の既婚者は、同世代の中でも比較的早く結婚した集団ということになり、偏った特徴を有している可能性があるということである。出産後の専業主婦化の強まりは、こうしたバイアスの影響かもしれない。まだ結婚や出産をしていない集団の動向を把握しなければ、女性のライフコースに関する正確な予測は難しいのである。

図1 6歳未満の子どもがいる有配偶女子の年齢別就業形態



注：第11回出生動向基本調査（1997）。対象は有配偶女子。カッコ内はサンプル数。

女性のライフコースに関する調査分析には、大きく分けて(1)女性が実際にどのようなライフコースをたどったのかを明らかにする実態分析と、(2)女性自身がどのようなライフコースを望ましいと考えるかを明らかにする意識分析、の二つがある。

2) European Labour Force Survey (1994) によれば、諸外国においても、子どもがいる女性といない女性では就業率に差がある。しかしながら、6歳以下の子どもがいても、デンマーク、東ドイツ、ポルトガル、フランス、イギリスなどでは雇用者として就業する人が5割～7割を占め、とくに最初の3つの国ではフルタイム就業者が5割を超えている (Rubery et al. 1999)。

(1)のライフコースの実態については、これまでも多くの調査研究がなされてきた（雇用職業総合研究所 1988; SSM 調査など）。その中で、高学歴化が進んだにもかかわらず、それが欧米のような就業継続には必ずしも結びついていない（田中 1998；真鍋 1998）、石油ショック以後、20代前半までの女性のライフコースは画一性を強めるが、20代後半以降では多様化した（岩井 1990）、女性のライフコースの変化は緩やかであり、変化が見られるとしても、一部の女性に限られる（岩井 1998）、といった知見が得られている。一方で、就業を継続した女性は、専業主婦となった女性よりも満足度や階層帰属意識が低いことも指摘されている（米村 1998）。すなわち1960年代出生コーホートに至るまで、就業継続、とくに両立の普遍化は確認できず、しかも就業を継続した女性が積極的にそのようなライフコースを選んだとも言えない状況であることがわかる。この最後のポイントは重要であろう。実態としてのライフコースが明らかになっても、それがどの程度満足な結果であるのかによって意味づけが変わってくるからである。たどったライフコースは同じでも、当事者の視点から見ると、それが思い通りの結果である場合と、不本意な場合、すなわち同じように「再就職」でも、はじめから「再就職」コースを望んでいた人と、本当は「両立」コース、あるいは「専業主婦」を目指していた人とは、意味がちがってくると考えられるのである。「両立型」が何%から何%に増えた、といった現状からだけでは、このような当事者の認識を反映した質的側面は見過ごされてしまう。そこで、実態とは別に、「どのようなライフコースを望んでいるのか」といった、(2)のライフコースに関する意識の抽出が必要になってくるのである。さらにこのようなライフコースに関する意識は、これから結婚や出産を経験する女性を分析対象とすることができることから、ライフコースの動向をはかる上で、晩婚化による現実のライフコースの偏りがある程度補うことができる。

ライフコースに関する意識分析の多くは代表的なライフコース・パターンに対する評価を訊ねるものである。最近の意識調査の結果をみると、20代、30代の女性では、「結婚・出産後も働き続ける」というライフコースを理想とするものが3割で、「子どもが大きくなってから再就職」は5割程度となっている（経済企画庁国民生活局 1998）。また日本労働研究機構の調査（1996）でも、現在の従業上の地位にかかわらず、再就職型を望ましいパターンとする人が最も多かった。

出生動向基本調査の独身者調査（国立社会保障・人口問題研究所 1999）でも理想のライフコース（ideal life course）を訊ねている³⁾。調査項目の中では、「結婚せずに就業を継続する（以下非婚）」「結婚するが子どもを持たずに就業継続する（以下DINKS）」「子どもをもち、就業も継続する（以下両立）」「出産・子育て時に就業をやめ、その後再就職する（以下再就職）」「子育てに専念し、以後就業しない（以下専業主婦）」の5類型を選択肢としてあげ、最も近いものを訊ねている⁴⁾。非婚とDINKSは、他の選択肢にくらべてケースが少ないので、本研究では両者をあわせ「就業のみ」とする。その結果、ライフコース

3) ライフコースに関する設問は第9次出産力調査から加えられた。この設問に関するこれまでの知見は中野（1991, 1994）を参照されたい。

4) 設問文「あなたの理想とする人生はどのタイプですか。」

は「就業のみ」「両立」「再就職」「専業主婦」の4類型となる⁵⁾。

まず、理想とするライフコースの年齢別の分布を図示してみると図2のようになった。年齢が上がるにつれて未婚者数が減ることに留意するため、既婚者も含んだ分布を示した(ただし既婚者の理想のライフコースはわからないので一括してある)。未婚者の理想のライフコース類型にできるだけ近い形で定義した現実のライフコースタイプの分布が図3である。未婚者については現在就業しているか就業していないか(学生を含む)で分類した。有配偶女子については、現在の就業状況と第1子出生後の就業状況等から類型化した⁶⁾。

現実のライフコースといっても、結婚や出産を経験していない若い年代にとっては、ライフコースは確定されたものではない。30代で「専業主婦」が多いが、これはこれから再就職する可能性がある女性も含んでいるので解釈には注意を要する。このような事情から、20代の理想のライフコース(図2)と比較できるのは、再生産年齢を過ぎほぼライフコースが確定していると考えられる40代の現実ライフコース(図3)となる。すると、両集団の分布は極めて近いことがわかる。もし全ての女性にとって望みどおりのライフコースの実現が可能であるとするならば、20年間、一定割合の女性がそれぞれのライフコースを望み、そのまま実現している、といった解釈ができよう。しかしこのような解釈は正しいのだろうか。両立を望む多くの女性が様々な障害によって就業継続を困難にしている(藤井他 1998)との指摘はどのように考えたらいいのだろうか⁷⁾。

ここで求められるのは、望むライフコースと現実のライフコースを正しくつなぐ作業である。個々人の女性にとって、現実のライフコースはどの程度理想を反映したものなのか。同じライフコースを目指しながら、それを実現できる人とできない人との違いはどこにあるのだろうか。これらを明らかにすることによってはじめて、両立支援といった労働・家族政策のニーズが切実なものとして顕在化するのである。

・理想と予想のライフコース・ギャップから見えるもの

まず、理想のライフコースを実現できる人はどのくらいいるのか、という問いから明らかにしよう。

5) これらのライフコースに関する選択肢は、経験的に多いパターンを挙げたにすぎない。選択肢には「その他」が加えられ、内容についての自由記入欄がついている。ここには選択肢以外のライフコースが具体的に記入されている。例えば1997年調査に関しては「結婚し、子どもも持たず仕事もしない」0.3%、「結婚はしないが子どもを持ち、仕事もする」0.1%「人それぞれなので理想はない」0.1%といったものがあつた。さらに不詳の回答も各調査回で1割程度存在している。両者を合わせて10%から15%ほどの回答が、提示された5つの選択肢に含まれなかったことになり、このような動向も多様化のひとつの側面と考えられる。

6) 夫婦票では妻の出生経験、第1子出生前後(妊娠中と生後1年)の妻の就業状態、妻の現在の就業状態を訊ねている。有配偶者の現実のライフコースについては以下のように定義した。

子どもがなく、現在就業している「就業のみ」

子どもが1人以上で、第1子生後1年に就業しており、現在も就業「両立」

子どもが1人以上で、第1子生後1年には無業であったが、現在は就業「再就職」

子どもが1人以上で、現在無業「専業主婦」

子どもがなく、現在も就業していない「なし」

7) さらに40代の両立型の4割程度が自営・家族従業者である。しかし現在の未婚女性にはほとんど自営・家族従業者がいない。その意味でも事情が異なることに留意すべきである。

図2 理想のライフコースの分布

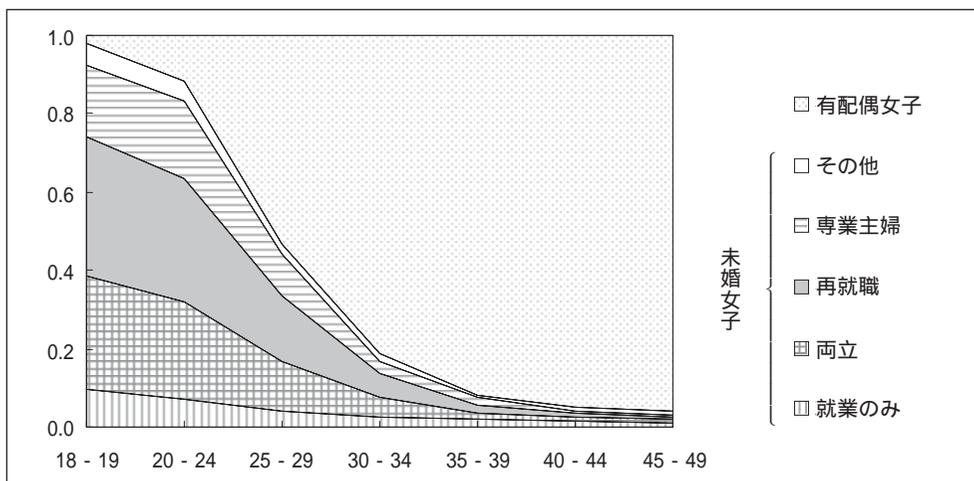
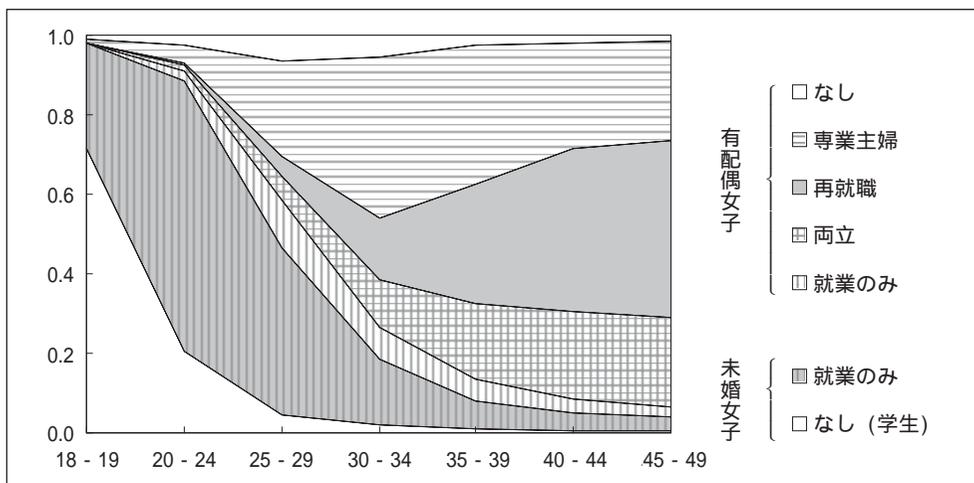


図3 現実のライフコースの分布



注：未婚者については現在就業しているか（就業のみ）就業していないか（なし（学生を含む））で分類した。有配偶女子については、現在の就業状況と第1子出生後の就業状況から以下のように定義した。

- 子どもがなく、現在就業している：「就業のみ」
- 子どもが1人以上で、第1子生後1年に就業しており、現在も就業：「両立」
- 子どもが1人以上で、第1子生後1年には無業であったが、現在は就業：「再就職」
- 子どもが1人以上で、現在無業：「専業主婦」
- 子どもがなく、現在も就業していない：「なし」

出生動向基本調査では、既婚者に現実の自分のライフコースが理想通りだったかどうかは訊ねていない。一方、現在の独身者が、将来理想通りのライフコースを実現したかどうかを知るには、パネル調査が必要であり、しかも少なくとも10年以上の年月を待たなければならないであろう。しかし同調査では独身者に、理想のライフコースとは別に、予想す

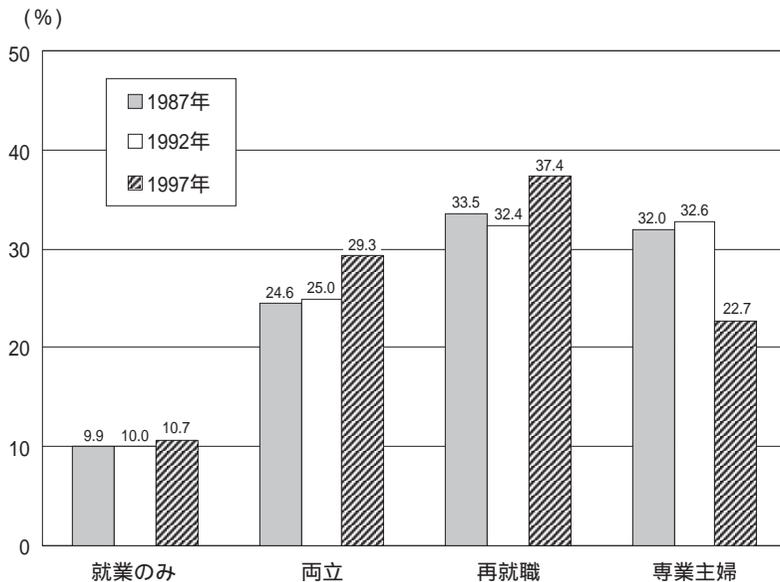
るライフコース (anticipated life course as possible outcomes) というものを訊ねている⁸⁾。理想と現実のギャップを直接考察することはできないが、理想と予想の回答の違いをもって、女性の望むライフコースの実現可能性をさぐることは可能であろう。むしろ、再生産年齢を過ぎた、現実のライフコースがある程度確定された女性に理想のライフコースを訊ねた場合、すでに確定した現実のライフコースにあわせて理想を変えてしまう、という歪み (認知的不協和の解消) も予想される。確かに未婚者の予想については不確定要素も多く、現実を完全に反映するものではないが、未婚者の理想については、事後的な判断よりもむしろ中立的であると言えるかもしれない。以下では、予想するライフコースは現在の女性の就業環境や子育て環境を反映し現実に近似するものであると仮定して分析を進める。

就業環境について不確定要素の多い学生を排除するため、ほとんどが就学期間を終えている25歳から34歳までの未婚女性の理想、予想それぞれの分布を図4、図5に示した。

理想のライフコースでは、調査回を追うごとに両立と再就職が増え、専業主婦が減少している。かつてオークリーは、中産階級の象徴であり、過酷な労働から女性を解放するものとしての「主婦」の誕生を描いたが (Oakley 1974)、そのような専業主婦に対する相対的魅力は全体的には減少傾向にあることがわかる。一方予想するライフコースでは、専業主婦だけでなく両立も減り、再就職のみが著しく増加している。

さて、回答者は理想と予想それぞれから一つずつ選んでいるので、その組み合わせは4×4で16通りとなる。過去3回の調査における、各組み合わせの分布を表1に示した。

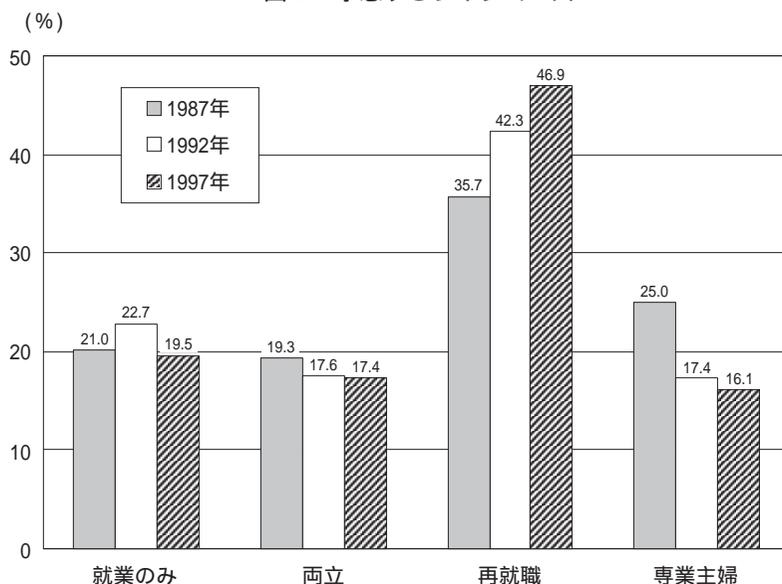
図4 理想のライフコース



注：対象は25-34歳の未婚女子。サンプル数は1987年513、1992年809、1997年1,059。

8) 設問文「理想は理想として、実際になりそうなあなたの人生はどのタイプですか。」

図5 予想するライフコース



注：対象は25-34歳の未婚女子。サンプル数は1987年513、1992年809、1997年1,059。

まず、最も多い組み合わせに注目してみよう。1987年、1992年と「理想は専業主婦であるが予想は再就職」という組み合わせが最も多かった。しかし1997年調査では「理想も予想も再就職」という人が最も多くなっている。その他大きな変化としては、「理想は両立だが予想は再就職」、「理想も予想も両立」という人が増加し、一方で「理想も予想も専業主婦」という人が減っているといったことである。

理想と予想が一致する人の割合がこの10年でどのように推移したかという、1987年が27.3%、1992年が26.7%、1997年が34.7%と、7.4ポイント上昇している（図6）。つまり

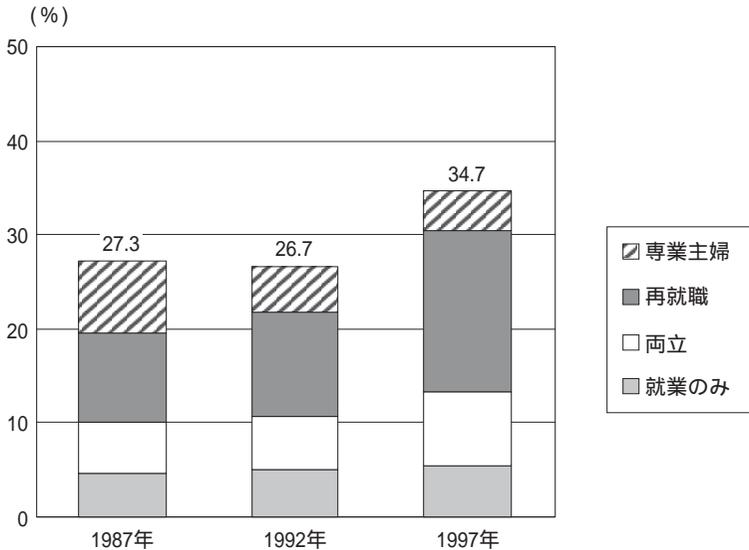
全体的には望むライフコースを実現しやすくなっているということになる。とはいえ、現在でもなお3分の2の女性が、理想通りのライフコースを実現できそうにない、と考えているのは驚くべき事実である。理想と予想のギャップについて、ライフコース別にもう少

表1 理想・予想ライフコースの組み合わせ

理想・予想	1987年	1992年	1997年
再就職・再就職*	9.4	11.1	17.2
専業主婦・再就職	14.4	19.3	13.8
両立・再就職	9.7	9.4	13.3
両立・両立*	5.5	5.7	7.8
再就職・専業主婦	10.1	7.8	7.8
再就職・就業のみ	6.6	7.0	6.9
再就職・両立	7.4	6.4	5.5
就業のみ・就業のみ*	4.7	4.9	5.4
両立・就業のみ	4.7	6.6	5.3
専業主婦・専業主婦*	7.8	4.9	4.2
両立・専業主婦	4.7	3.3	2.8
就業のみ・再就職	2.1	2.5	2.6
専業主婦・両立	5.7	4.2	2.6
専業主婦・就業のみ	4.1	4.2	2.0
就業のみ・両立	0.8	1.2	1.4
就業のみ・専業主婦	2.3	1.4	1.2
計	100.0	100.0	100.0

注：*は理想と予想が同じである組み合わせ

図6 理想と予想が一致している割合



し詳しくみてみよう。

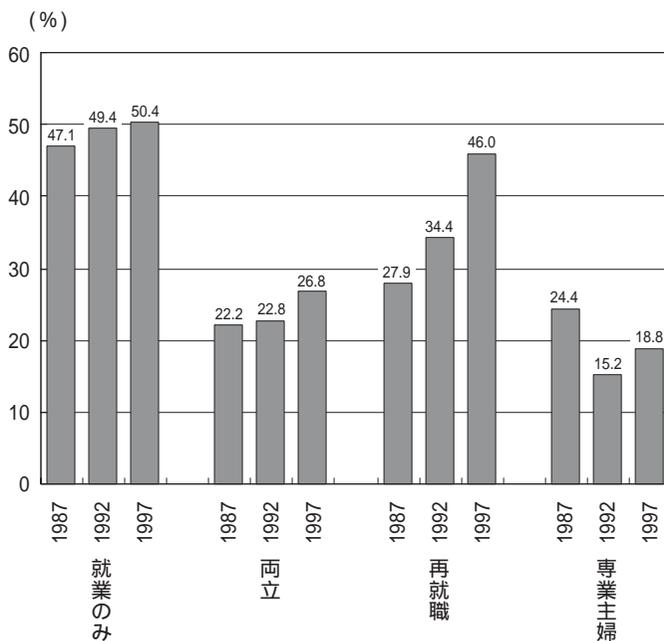
図7は、理想のライフコース別に集団をわけ、そのなかで予想も同じライフコースである人の割合を示している。すなわち、理想のライフコースごとの実現可能性の程度と解釈できる。これを見ると「就業のみ」を理想とした場合が最も実現しやすく（97年には50.4%）、続いて「再就職」（46.0%）、そして「両立」、「専業主婦」と続いている。とくに「再就職」の実現可能性が近年急激に増している。「両立」も10年間で22.2%から26.8%とわずかながら改善しているようだ。一方で「専業主婦」を理想としてもそれが実現できると考える人は2割以下（18.8%）と少ない。

図8のほうは、予想するライフコース別に集団をわけ、その中で、理想も同じであった人の割合である。すなわち、予想するライフコースの本意の程度と解釈することができる。これによると、とくに1997年調査に関しては、「両立」を予想する場合に、それが本人の理想通りである可能性が最も高くなっている（45.1%）。続いて「再就職」、「就業のみ」と続き、「専業主婦」の本意の程度は年々下がる傾向にある（10年間で31.3%から26.3%）。

理想と予想のギャップに関する以上の結果をまとめると、女性が理想どおりのライフコースを実現できると考える状況は年々整いつつあるが、細かく見てみると、どのようなライフコースを理想としているかによってずいぶん状況が異なるようである。例えば再就職を理想とすると46%が実現できると判断するのに対し、両立を理想としても実現できると考えるのは27%にとどまる。また両立を予想する人の45%が、それが理想通りのライフコースであるのに対し、就業のみや専業主婦を予想する人の7割以上が、実はそれが理想ではなく、ある意味で不本意なライフコースであることが明らかになった。実現可能性の程度を横軸、本意の程度を縦軸にとってプロットすると、図9のようになる。

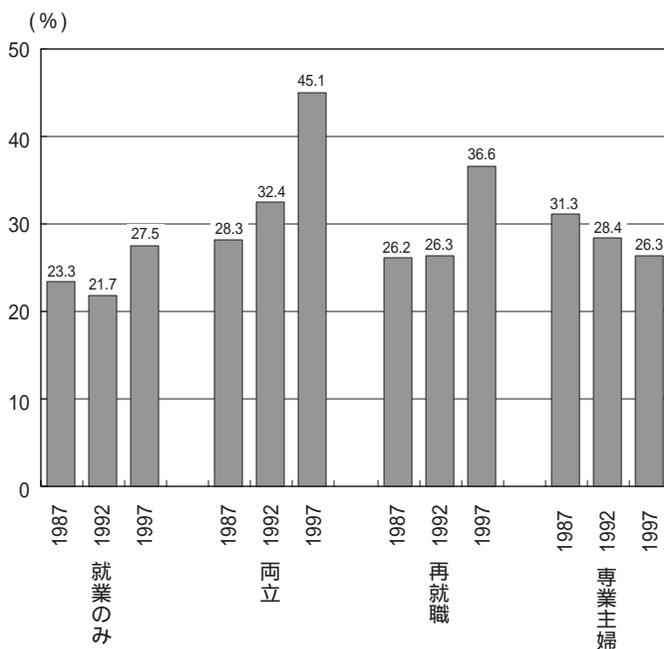
軸の交点にはあまり意味が無く、4つのライフコースの相対的位置が重要である。就業

図7 理想コースが実現すると予想される割合
(実現可能性の程度)



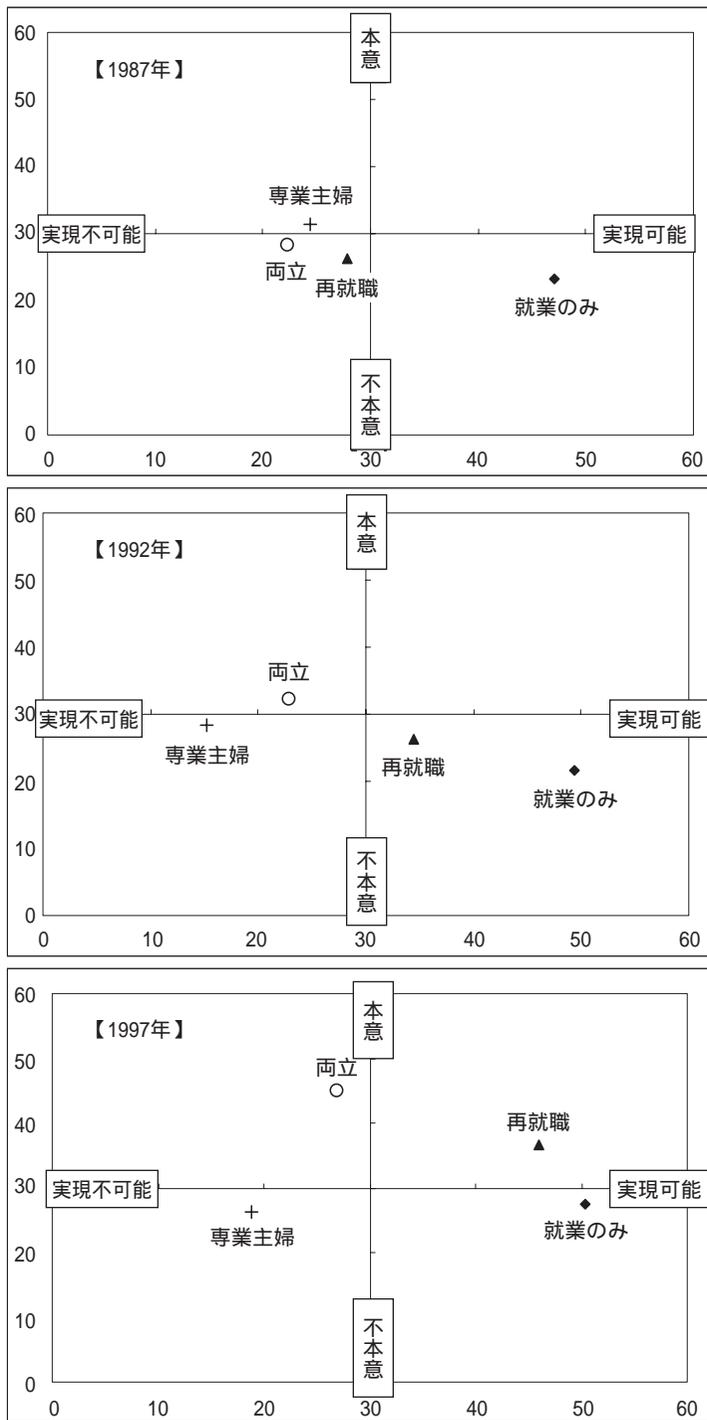
注：当該ライフコースを理想とする人にしめる，同じライフコースを予想する人の割合。

図8 予想するコースが理想通りである割合
(本意の程度)



注：当該ライフコースを予想する人にしめる，同じライフコースを理想とする人の割合。

図9 ライフコース・ギャップにみる各ライフコースの特徴



注：横軸は実現可能性の程度（％），縦軸は本意の程度（％）。

のみは、どの調査時においても相対的位置を変えていないが、その他のライフコースは位置を大きく動いていることがわかる。たとえば両立は、当初実現しにくく、かつ不本意な人を多く含むライフコースであったが、1997年では、本意の程度が急激に高まっている。10年前までは「しかたなくなるもの」であった両立は、今や「なりたくてなるもの」という特徴を強めている。再就職は徐々に実現しやすいライフコースとなり、さらに本意の程度も上昇している。一方、専業主婦は当初の本意の程度が年々下降し、97年時点では最も実現しにくく、かつ最も不本意な結果と受け止める人が多く含まれるライフコースとなっている。プロット図を参考にして、1997年時点の各ライフコースの特徴を簡潔にまとめると、

就業のみ：実現しやすいが、本意でないことが多い

両立：実現しにくいだが、実現すれば本意であることが多い

再就職：実現しやすく、実現した場合も本意であることが多い

専業主婦：実現しにくく、実現した場合は本意でないことが多い

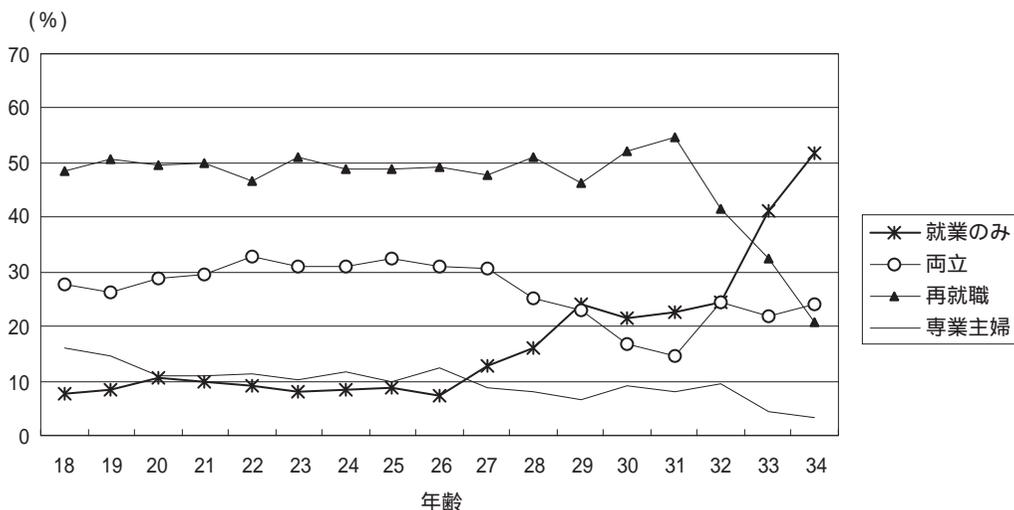
となる。とりわけ専業主婦をめぐる「ねじれ」現象は重要であろう。理想と予想それぞれのライフコース分布からだけではわからない、ライフコース選択の不自由さを象徴的に示している。専業主婦になりたい女性が存在し、また実際に専業主婦になっている女性が存在するからといって、「専業主婦になりたい女性が専業主婦になっている」とは言えない、すなわち、専業主婦になりたい集団と専業主婦になる集団はかなり異なっていることを示唆する。一方、両立が予想される場合は、結果が本意である人が相対的に多い。とはいえ、両立を予想する女性の半数以上が、実は両立を理想とはしていない、というのも事実である。理想とされるライフコースは多様であり、それぞれのライフコースが多かれ少なかれ「ねじれ」現象を抱えているのである。

・ 年齢別にみた理想のライフコースの実現性

以上でみてきたように、女性のライフコース選択はそれほど自由なものではない。確かに10年前と比較すると、専業主婦を除いて、理想のライフコースは実現しやすいものとなっている。しかし、それでも未婚女性全体の3分の2が理想とは異なるライフコースをたどることになると予想しているのである。次に、年齢によってライフコースの予想がどのように異なるかを見てみよう。図10～図12は、理想のライフコースを同じくする集団の中で、予想するライフコースの分布を年齢別にみたものである。

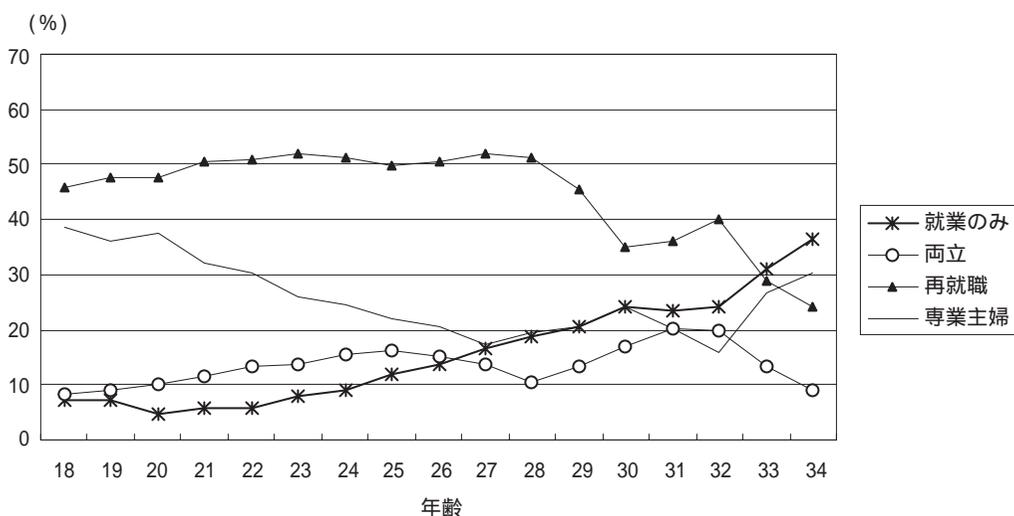
図10は、理想のライフコースが両立である女性の予想するライフコースの分布である。20代前半までは、再就職コースが50%前後、理想通りに両立を予想する人が30%前後で、専業主婦と就業のみを予想する人はともに10%程度であった。ところが26歳を超えると、両立を実現できるとする人が減りはじめ、代わって就業のみが増えている。30歳以上になると、再就職が激減し、就業のみがさらに増加している。両立を目指す30代の未婚女性の半数近くが、現実的には非婚や子どもを持たないという生き方を予測していることになる。

図10 年齢別、「両立」を理想とする女子の予想するライフコース：1997年



注：対象は両立を理想とする未婚女子936。グラフの平滑化のため当該年齢を中心とした前後3歳の割合の移動平均を描いている。図11、図12についても同様。

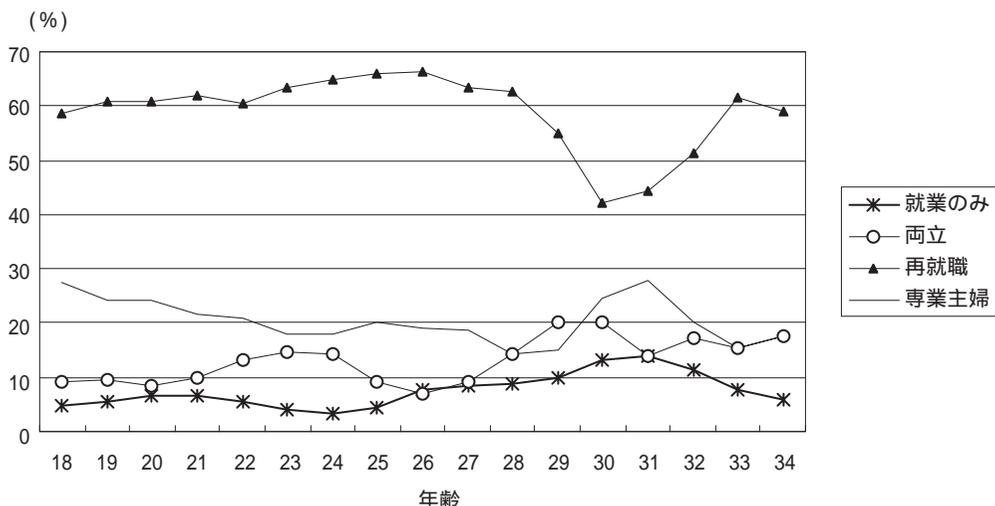
図11 年齢別、「再就職」を理想とする女子の予想するライフコース：1997年



注：対象は再就職を理想とする未婚女子1,179。

同様に再就職を理想とする集団を見てみよう（図11）。再就職を理想とする20代前半の女性は半数が理想通りに再就職を予想しているが、専業主婦を予想するものも4割近くいる。理想は再就職であっても実際には思い通りに仕事を再開できない、と考える人がかなり存在することになる。一方、就業のみや両立はそれぞれ1割程度である。年齢が20代後半の人たちでは、予想が再就職である人の割合には変化がないが、予想が専業主婦であるものが減少し、代わって徐々に両立と就業のみが増加している。これと比較すると30歳間

図12 年齢別、「専業主婦」を理想とする女子の予想するライフコース：1997年



注：対象は専業主婦を理想とする未婚女子713.

近の人々では、予想が再就職である人が大きく減少し、就業のみがさらに伸びていることがわかる。理想が再就職である女性も、両立を目指す女性と同様、年齢が高くなると、結婚や出産をあきらめるといった選択肢が現実味を帯びているようだ。ただ、理想が両立である人と異なり、専業主婦という選択肢も2割程度存在する。

最後に専業主婦を理想とする人の予想するライフコースを年齢別に見てみよう（図12）。30歳近くまで6割前後が予想は再就職であると答えている。前の二つの集団にくらべて、年齢効果は小さい。とくに、年齢が高い人でも就業のみが増加しないことが特徴である。

以上の結果から、両立や再就職を理想とする場合、高い年齢層では、就業のみを予想する可能性が高くなることが明らかになった。当然のことながら、この結果はある一時点での年齢別の結果をみたものであり、あるコーホートについての年齢ごとの変化を記述したものではない。しかも、年齢が高くなるほど結婚によって対象者が抜け落ちている（図2参照）。しかしながら両立を目指す女性が結婚を延期すること自体が少子化に拍車をかけることを予期させる結果であることは注目に値する。不本意な非婚やDINKSを回避するために、両立を目指す女性が思い通りのライフコースを選択できるような支援策は、どのように進められるべきなのだろうか。そのためには、両立を理想としつつもそれを断念している女性がどのような状況におかれているのかを把握する必要がある。

・「両立」の実現／断念を規定するもの

両立を理想としながらそれを実現できると考える人と、実際には別のライフコースをたどると予想する人との違いはどのようなところにあるのであろうか。両立を理想とする、就業している23～49歳の未婚女性に対象を限定し、予想するライフコースの規定要因を多

項ロジスティックモデル⁹⁾により分析した。被説明変数は予想されるライフコースであり、両立を実際に実現する（両立実現）、結婚あるいは出産をせずに就業をつづける（就業のみ）、結婚・出産を機に就業をやめる、あるいは中断する（育児専業）、の3水準とした。「両立実現」には予想するライフコースが両立である場合、「就業のみ」には予想が就業のみである場合、「育児専業」には予想が再就職が専業主婦の場合がそれぞれ対応する¹⁰⁾。

さて、ライフコース予測の背景を探る目的として、関連が予想される次のような変数をモデルに含め、その影響を検証する。

a) 年齢、学歴、交際状況。年齢は、前節の図11で示したように、高くなるほど両立断念の傾向が予想される。学歴も女性の結婚や出生行動への影響が常に議論される変数である（白波瀬 1999）。ライフコースの見通しは、結婚を考える相手が存在する場合、その相手の事情に影響をうけるかもしれない。そこで交際状況に関する変数を導入する。結婚を考える交際相手がいる場合および婚約者がいる場合は「結婚したい恋人あり」とし、交際相手がいない、あるいは恋人はいるが結婚を考えていない場合を「それ以外」とした。

b) 母親のライフコース。「結婚前からずっと勤めを続けてきた」場合を「両立」、「ずっと自営の仕事（農業を含む）や内職を続けてきた」を「自営・農業」、「子どもが大きくなってから再就職した」「ずっと家事・育児をしてきた」を「育児専業」とした。身近な女性である母親のライフコースの影響の仕方は二つ考えられる。人生のモデルとして同じライフコースに向かわせる可能性と、近年、両立をしている女性にとって、保育資源としての母親の存在が大きいので、育児支援を期待できる無業の母親がいると本人は両立実現に向かうという可能性である。

c) 現在の就業環境に関する変数。両立が断念されやすい職場環境や働き方を特定することは、両立支援政策の効果的な導入にとって不可欠である。これまでも現実の女性の就業継続を就業環境によって説明する実証分析がなされることはあったが、もともと就業継続志向の強い女性が特定の就業環境を選択していたという逆の因果性が想定されることによって、しばしば結果の解釈が難しかった。今回ははじめから両立を理想とする女性を対象を限定しているため、職場環境の効果の解釈が比較的容易である。具体的には現在の職業が専門職であることが両立実現に正の効果をもたらすかどうか、企業規模によって差があるかどうか、現在の年収が高いほど両立実現の見込みが高くなるかどうか、を検証する。

d) 仕事へのかかわり方に関する自己評価。職場の客観的な条件以外に、仕事にやりがいをもっているか、昇進の見込みがあるかどうか、仕事と私生活のバランスがうまくいっているか、といった主観的な評価によって両立実現の見通しが異なるかどうかを検証す

9) 多項ロジスティックモデルはロジスティックモデルの多項目への拡張であり、各個 i 人に対し被説明変数の各比較カテゴリー j ($j > 1$) の確率 p_{ij} と基準カテゴリー ($j = 1$) の確率 p_{i1} の比の対数 $\log(p_{ij}/p_{i1})$ が、

$$\log(p_{ij}/p_{i1}) = \sum_k \beta_{jk} x_{ik}$$

で与えられる。ここで x_{jk} は k 番目の予測変数の個人 j の値であり、 β_{jk} は比較カテゴリー j ごとの x_k の影響を表す回帰係数である。

10) 理想が両立である女性の予想するライフコースの分布は、就業のみ21.9%、両立23.2%、再就職45.0%、専業主婦9.9%となっている。

る¹¹⁾。

これらの変数についての基礎的な集計結果を表2に示した。理想が両立である女性の傾向をみるために、他のライフコースを理想とする女性も含めた全体についての分布も併記した。理想が両立である女性に特徴的な傾向として、大卒者が多い、官公庁勤務が多い、仕事にやりがいがある人が多い、昇進の見込みのある人が多いということが言えそうである。

以上のような理想が両立である女性の特徴をふまえた上で、予想されるライフコースの規定要因を見てみよう。表3に結果を示した。ここでは「両立実現」を基準カテゴリーとした場合の「就業のみ」および「育児専業」に対する結果と、「育児専業」を基準カテゴリーとした場合の「就業のみ」に対する結果を掲載した。これによって3つの選択肢を2つずつ組み合わせ、その違いをもたらす要因を明らかにすることができる。いずれも最尤法によって推定し、カッコ内のカテゴリーに対する当該カテゴリーのオッズ比を示した。まず予想が「就業のみ」である人と、「両立実現」である人との違いは何であろうか。「両立実現」にくらべて「就業のみ」である確率を高くする方向に有意であった変数には、年齢35-49歳、母親が育児専業、従業員数300人以上、仕事で私生活が犠牲になりがち、といったものである。一方、低める方向に有意、すなわち両立実現に向かわせる変数は年齢23-24歳、昇進の見込みがある、といったものであった。

次に、「両立実現」にくらべて「育児専業」である確率を有意に高める変数を見てみよう。母親が育児専業、従業員数300人以上、仕事で私生活が犠牲になりがち、などであった。一方有意に低める、すなわち両立実現に向かわせる変数は、大学卒、官公庁勤務、昇進の見込みあり、などであった。

「育児専業」にくらべて「就業のみ」である可能性を高める方向で有意だった変数には、年齢35-49歳、官公庁勤務、仕事で私生活が犠牲、などがあつた。一方低める方向で有意だったもの、すなわち育児専業に向かわせる変数には、年齢23-24歳、結婚したい恋人がある場合であった。

以上のことから、何が見えてくるだろうか。まず両立を理想としつつも、年齢が高くなると両立を断念し非婚やDINKSが現実の可能性として浮上してくるという傾向が改めて確認された。30代後半の女性が両立を断念して就業のみを予想する確率は、20代後半に比べて17倍にもなる。ただし、両立の実現と育児専業の選択に対してはとくに年齢の影響は見られなかった。また、大企業勤務である場合は、両立を理想としながら、現実には結婚・出産によって仕事を中断、あるいは離職する可能性が高いということになる。そして興味深い結果としては、母親のライフコースが育児専業であった場合、両立を理想とする娘は両立を断念する傾向が強い、という点である。母親が育児専業の場合は、母親が両立を経験した場合に比べて2.33 ($\exp(0.50 - (-0.35))$) 倍の確率で両立を断念し育児専業を予想す

11) 仕事へのかかわり方に関する設問は以下の通りである。4段階の回答を「あてはまる」と「あてはまらない」の2段階にまとめた。

- i 仕事にやりがいを感じている
- j 今の仕事で昇進したり、事業で成功する見込みは高い
- k 仕事のために、私生活を犠牲にすることがよくある

表2 分析変数の単純集計

		(%)	
		理想が両立	未婚女子全体
理想の ライフコース	就業のみ	0.0	11.1
	両立	100.0	28.3
	再就職	0.0	37.6
	専業主婦	0.0	22.9
予想する ライフコース	就業のみ	21.9	23.4
	両立	23.2	16.4
	再就職	45.0	45.1
	専業主婦	9.9	15.1
年齢	23-24歳	30.0	30.1
	25-29歳	41.0	41.8
	30-34歳	18.6	15.5
	35-49歳	10.4	12.6
学歴	中学・高校	26.2	32.9
	専修・短大	41.0	46.0
	大学	32.8	21.1
交際状況	結婚したい恋人あり	23.9	30.0
	それ以外	76.1	70.0
母親の ライフコース	両立	22.4	21.8
	自営・農業	24.2	22.5
	育児専業	53.4	55.7
職種	専門職	32.1	26.2
	それ以外	67.9	73.8
従業員数	1-29人	23.4	25.3
	30-299	30.3	30.2
	300人以上	32.8	37.3
	官公庁	13.5	7.1
年収	200万未満	26.5	28.7
	200万-400万	55.2	56.2
	400万以上	18.3	15.1
仕事やりがいあり	あてはまる	71.0	57.5
	あてはまらない	29.0	42.5
昇進見込みあり	あてはまる	33.1	23.4
	あてはまらない	66.9	76.6
仕事で私生活犠牲	あてはまる	52.4	44.8
	あてはまらない	47.6	55.2
サンプル数		393	1,387

注：対象は年齢23-49歳，調査時点で就業している未婚女子。

表3 「両立」を理想とする独身女性の予想するライフコースの規定要因

定数項	就業のみ/両立実現		育児専業/両立実現		就業のみ/育児専業		
	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	
定数項	-0.49		0.58 *		-1.07 **		
年齢	23-24歳	-1.42 ***	0.60	-0.01	0.82	-1.41 ***	0.73
	(25-29歳)	(-0.91)	1.00	(0.19)	1.00	(-1.10)	1.00
	30-34歳	0.41	3.75	0.35	1.18	0.06	3.18
	35-49歳	1.92 ***	16.95	-0.53	0.49	2.45 ***	34.77
学歴	中学・高校	0.20	1.05	0.35	1.23	-0.15	0.86
	(専修・短大)	(0.15)	1.00	(0.15)	1.00	(0.00)	1.00
	大学	-0.34	0.61	-0.50 *	0.53	0.15	1.16
交際状況	結婚したい恋人あり (それ以外)	-0.50 # (0.50)	0.37 1.00	0.08 (-0.08)	1.18 1.00	-0.58 * (0.58)	0.31 1.00
母親の ライフコース	両立	-0.44	0.89	-0.35 #	0.81	-0.09	1.10
	(自営・農業)	(-0.33)	1.00	(-0.14)	1.00	(-0.18)	1.00
	育児専業	0.77 **	2.98	0.50 **	1.90	0.27	1.57
職種	専門職 (それ以外)	0.04 (-0.04)	1.09 1.00	0.01 (-0.01)	1.03 1.00	0.03 (-0.03)	1.06 1.00
従業員数	1-29人	-0.27	0.99	-0.11	0.72	-0.15	1.38
	(30-299)	(-0.26)	1.00	(0.22)	1.00	(-0.47)	1.00
	300人以上	0.80 *	2.89	0.92 ***	2.02	-0.12	1.43
	官公庁	-0.28	0.98	-1.03 ***	0.29	0.74 *	3.38
年収	200万未満	-0.54 #	0.59	-0.38	0.68	-0.15	0.87
	(200万-400万)	(-0.00)	1.00	(0.01)	1.00	(-0.01)	1.00
	400万以上	0.54	1.72	0.37	1.44	0.17	1.19
仕事やりがいあり	あてはまる (あてはまらない)	0.00 (-0.00)	1.01 1.00	-0.10 (0.10)	0.81 1.00	0.11 (-0.11)	1.24 1.00
昇進見込みあり	あてはまる (あてはまらない)	-0.57 ** (0.57)	0.32 1.00	-0.51 ** (0.51)	0.36 1.00	-0.07 (0.07)	0.87 1.00
仕事で私生活犠牲	あてはまる (あてはまらない)	0.88 *** (-0.88)	5.82 1.00	0.39 * (-0.39)	2.18 1.00	0.49 ** (-0.49)	2.67 1.00
-2 Log L			606.59				
モデル _χ ²			179.58 ***				
自由度			34				
サンプル数			393				

注：対象は年齢23-49歳，調査時点で就業している未婚女子で、「両立」を理想のライフコースとしているものに限定。多項ロジスティックモデルによる推定結果。各変数の効果についてはカテゴリー全体の総和が0となる。カッコ内カテゴリーに対する当該カテゴリーのオッズ比を示した。被説明変数は、「両立を理想としている女性の予想する結果で、「両立を実現」「結婚・出産をせずに就業を継続（就業のみ）」「就業継続を断念し再就職あるいは専業主婦（育児専業）」の3水準。「両立実現」を基準にした場合と、「育児専業」を基準にした場合の結果を示した。

p<0.10, * p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001 (両側検定)

ることになる。また、母親が両立を経験していると本人も両立実現を予測する傾向も見られた。身近に両立を達成した人がいることで、当事者の自信につながるのかもしれない。また両立を実現するうえで必要な情報が、両立を実現した母親を通じてアクセスしやすいという可能性も考えられる。母親のライフコースと本人のライフコース見込みとの関係についてはさらに詳細な分析を要するが、母親業の再生産といった心理的メカニズムの議論(Chodorow 1978)とも関連しそうな結果である。

一方で、就業と育児の両立を実現できる条件とはどのようなものなのであろうか。大企業においては両立が断念される傾向にあるのに対し、官公庁勤務の場合、両立を実現できると考えやすい傾向にある。いずれも両立を理想としている女性のみを対象としているので、両立志向の女性が官公庁にもともと多い、という影響を排したうえで、民間企業と官公庁における両立をめぐる環境的格差の存在を指摘できたことになる。さらに現在の年収が高いからといって必ずしも両立実現に向かうとは限らないことも確認できた。むしろ昇進の見込みがないことや仕事で私生活が犠牲になっているといった感覚が、両立を断念することに大きく関与している。また専門職であるかどうかはライフコース見通しに対して明確な影響をもたらしていなかった。

両立を理想とする女性が結婚の時期を遅らせるということは、非婚や子どもを持たない生き方に帰着する可能性を大いに高めることを意味する。このことによって確かに女性の労働力率は上昇するであろう。しかしこれは不本意な結果としての少子化を進めることにほかならない。一方で、昇進の見込みがないことや仕事と私生活とのバランスがうまくとれないことから比較的早く育児専業を選択する女性も多いことが伺えるが、こちらも不本意なかたちでの労働市場からの離脱を意味している。マクロでみた女性の労働力率や出生行動からではわからないこのようなギャップの把握と解消こそが、今後の政策課題にされるべきポイントなのではないだろうか。とくに両立支援に関しては、これまで漠然と女性全体が対象とされることが多く、その効果を把握することも難しかった。しかし両立を望みながら断念している女性に対象を絞ることによって、成果を確実にし、さらに政策効果を正しく評価するという試みも視野に入れるべきであろう。ちなみに両立を望みながら断念している女性は25歳から35歳の未婚女性の21%にあたり、決して少なくはない。同様に、育児後の再就職を望みながら断念している女性に対しては、思い通りの再就職を可能にするような政策が求められることになる。再就職を断念している女性も全体の20%にあたる。

・ 結び

日本において就業と育児を両立する女性が欧米の先進国と比べて少ないことが指摘されて久しい。このような状況は、当事者である女性がどの程度望んだ結果なのであろうか。本論文では、ライフコース類型の実際の分布や、理想のライフコースの分布を個別に見るだけでなく、個々人の理想とするライフコースが予想するライフコースとどのくらい一致しているか、といった当事者の視点に着目した分析を行った。その結果、1997年時点では

3人に2人の未婚女性が、理想と予想のライフコースにギャップを抱えていることが明らかになった。予想するライフコースをある程度現実を反映するものであると考えるならば、この結果は、マクロで見た場合の理想のライフコースの分布と現実のライフコースの分布が近いからといって、「望む人が実現している」とは限らないことを示している。とくに「両立」と「専業主婦」を理想とする場合、理想が実現するという見込みが相対的に低い。また「就業のみ」と「専業主婦」が予想される場合には、それが理想が断念された結果、すなわち不本意である可能性が相対的に高いことが示された。日本において子育て期に就業をつづける女性が少ないという現状については、しばしば社会による両立支援策の遅れによるのか、当人の意図通りなのかといった議論が展開されてきたが、未婚者のライフコースの見通しをみる限り、当事者の意図するところであるとは言い難い状況が示唆された。

一方で、両立を理想とする女性自体は年々増加している。そこで、「両立を理想としつつも、現実には両立が難しい」と判断することに関する規定要因を多変量解析によってさぐってみた。その結果、「就業のみ」という予想には現在年齢が高いこと、母親が育児専業であった、仕事と私生活のバランスがうまくいかないことが、そして「育児専業」という予想には、母親が育児専業であった、企業規模が大きかったといった変数が有意差を示した。一方、「両立を実現できる」という予想には、母親が両立を経験、官公庁勤務、昇進の見込みがあるといった変数が関連していた。現在の年収が高いほど就業継続をめざすという傾向は見られなかった。大企業における女性の活用が進み、私生活とのバランスが保証される就業環境が整備されれば、両立を断念する女性（その多くが非婚あるいは子どもを持たないことを予想）は確実に減少するであろう。また母親のライフコースが娘の両立達成の見込みに有意に関連しているといった結果は、女性の就業パターンの世代を通じた再生産を意味し、職場環境といった現在の状況の改善だけでは、両立の断念を解消できない可能性を示唆している。両立の経験にともなう有用な情報が母親からのみではなく、広く社会を通じて伝達されるようなしくみが求められるところである。

昨今では、女性の生き方に影響を与える政策は、マクロな視点からでなく、常に女性個人の意思を尊重して進められることが期待されている。とくに特定のライフコースが優遇され、結果として女性のライフコースの選択肢を狭めることになれば、現在進められている多様なライフコースの基盤整備に逆行することになる。多様な生き方が理想とされる限り、政策もそれぞれの事情に合わせ、多様化しなければならない。対象となるひとつひとつの集団は小さくなるかもしれないが、確実に成果を上げることによって全体的な効果はむしろ大きくなることを見込まれる。有効な政策を導くためには、個々人の意識と社会全体の動向をさまざまな角度から考察し、事実を確認することが不可欠である。本論文での取り組みはこうした作業の試みであった。

参考文献

Aldous, J. (1990) "Family Development and the Life Course: Two Perspectives on Family Change," *Journal of Marriage*

and the Family 52, pp.571-583

- Chodorow, N. (1978) *The Reproduction on Mothering* (大塚光子・大内管子訳 (1996) 『母親業の再生産』新曜社)
- 藤井治枝, 渡辺峻 (編著) (1998) 『日本企業の働く女性たち』ミネルヴァ書房
- 今田幸子 (1989) 「女子キャリアの展開」『雇用と職業』No.67, 雇用職業総合研究所, pp.1-6
- 今田幸子, 平田周一 (1992) 「女性の就業と出生率; ライフコース・アプローチ」『日本経済研究』No.22, p1-18
- 今田幸子 (1996) 「女子労働と就業継続」『日本労働研究雑誌』No.433, pp.37-48
- 岩井八郎 (1990) 「高度成長期以後の学歴とライフコース」『教育社会学研究』第46集, pp.71-95
- 岩井八郎 (1998) 「女性のライフコースの動態 日米比較研究」岩井八郎編 『ジェンダーとライフコース』(1995年SSM調査シリーズ13) 1995年SSM調査会, pp.1-29
- 岩澤美帆 (1999) 「中小企業に就業する者の結婚・配偶者選択」(社)生活福祉研究機構 『中小企業就業者の実態に関する調査研究報告書』, pp.17-37
- 経済企画庁国民生活局 (1998) 『平成9年度 国民生活選好度調査: 女性のライフスタイルをめぐる国民意識 - 勤労, 家庭, 教育』
- 国立社会保障・人口問題研究所 (1999) 『独身青年層の結婚観と子ども観 - 第11回出生動向基本調査第 報告書』
- 雇用職業総合研究所 (今田幸子, 平田周一) (1988) 『女性の職業経歴 1975年, 1983年 「職業移動と経歴 (女子) 調査」再分析』職研調査研究報告書 No.77
- 真鍋倫子 (1998) 「20歳代の就労停止と結婚・出産」岩井八郎編 『ジェンダーとライフコース』(1995年SSM調査シリーズ13) 1995年SSM調査会, pp.31-45
- 中野英子 (1991) 「未婚女子の結婚観 - ライフコースとの関連で - 」『人口問題研究』第47巻第3号, pp.42-52
- 中野英子 (1994) 「出生行動と就業行動 - 女子ライフコースの視点から - 」坂田義教, 鈴木泰, 清水浩昭編著 『社会変動の諸相』ミネルヴァ書房
- 永瀬伸子 (1999) 「少子化の要因: 就業環境か価値観の変化か」『人口問題研究』第55巻第2号, pp.1-18
- 日本労働研究機構 (1996) 『女性と仕事に関するアンケート』
- Oakley, A. (1974), *Housewife*, London, Allen Lane (岡島茅花訳 (1986) 『主婦の誕生』三省堂)
- 小倉千加子 (1998) 「少子化に関する意見・この人に聞く Vol.6」厚生問題研究会 『厚生』Vol.53 No.7, pp.8-10.
- 大久保孝治 (1990) 「ライフコース分析の基礎概念」『教育社会学研究』第46集, pp.53-70
- 大沢真知子 (1999) 「仕事と家庭の調和のための就業支援: 日本の雇用慣行の変化のなかで」『季刊社会保障研究』Vol.34 No.4, pp.385-391
- Rubery, J., M. Smith, and C. Fagan (1999) *Women's Employment in Europe: Trends and Prospects*, London, Routledge
- 新谷由里子 (1998) 「結婚・出産期の女性の就業とその規定要因: 1980年代以降の出生行動の変化との関連より」『人口問題研究』第54巻第4号, pp.46-62
- 白波瀬佐和子 (1999) 「女性の高学歴化と少子化に関する一考察」『季刊社会保障研究』Vol.34, No.4, pp.392-401
- 総務庁統計局 (1997) 『労働力調査特別調査報告』労働力調査資料 第61号
- 田中重人 (1998) 「高学歴化と性別分業 女性のフルタイム継続就業に対する学校教育の効果」盛山和夫・今田幸子編 『女性のキャリア構造とその変化』(1995年SSM調査シリーズ12) 1995年SSM調査会, pp.1-16
- 山田昌弘 (1999) 『家族のストラクチュアリング』新潮社
- 米村千代 (1998) 「主婦であること・働くことと階層意識」渡辺秀樹・志田基与師編 『階層と結婚・家族』(1995年SSM調査シリーズ15) 1995年SSM調査会, pp.181-198

The State of Women's Life Courses in Contemporary Japan: Focusing on Never-married Women's Prospects

Miho IWASAWA

This paper attempts to demonstrate the state of women's life courses focusing on the gap between the "ideal" life course and the "anticipated" life course as possible outcomes of never-married women, and to examine the determinants of these inconsistencies, that is, those who give up trying to realize their ideal life course by using multinomial logistic models. The data used in this study was obtained from the 9th (1987), 10th (1992), and 11th (1997) Japanese National Fertility Survey.

In contemporary Japan, about seventy percent of married women with children aged less than six are not working. The question is to what extent those women are satisfied with their current situation. For never-married women, the possibility of realizing an ideal life course is becoming higher in this decade. Even in 1997, however, two thirds of never-married women foresaw that they would pursue a disagreeable life course. Especially over seventy percent of women whose ideal life course would be "combining work and family" and eighty percent of women whose ideal life course would be "remaining as a housewife" end up abandoning their ideal.

For women whose ideal would be "combining," such characteristics as expecting to be promoted, mother's success in combining, and being a government employee have significant positive effects on their desires being realized. On the other hand, when women are working at large companies, or their mothers were not working while they were in their childhood, they are apt to suppose that they would stop working for raising their children. Then women who are in the higher-age bracket or can not maintain an adequate balance between work and private life tend to continue working without getting married or having any children.